

第2節 坂井南集落－藤井平から七里岩台地へ－

伊藤正彦

1. はじめに

坂井南遺跡の調査は現在までに7次を数え、延べ調査面積約27,400㎡となる。古墳時代前期住居址98軒、方形周溝墓12基が検出され、住居址群と墓域がセットとなり古墳時代前期社会を解明する上で良好な資料となり得るものである。遺跡は韭崎市中央部に位置する韭崎台地（通称、七里岩台地）上に立地する。塩川・釜無川の両河川に挟まれた細長い台地であり、台地上には久保（窪）・沢と呼ばれる地名もあり、湧水が豊かで古くから集落が発達している。眼下の塩川右岸河岸段丘上には藤井平と呼ばれる平坦で長大な氾濫源が広がる。古く「藤井五千石」と称されたほど稲作が盛んで肥沃な穀倉地帯であるが、地形観察からは自然堤防状の微高地が所々に発達し、その間を網の目のように河川が流下する地形であり、度重なる氾濫によって現在の平坦地が形成されたことが判明している。調査により明らかとなった弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡は前述した藤井平及び韭崎台地上に主として展開している。

2. 遺跡の消長

市内でこれまでに調査により明らかとなった弥生時代後期及び古墳時代前期の遺跡を確認しておく。なお、時間軸は中山誠二・小林健二氏の業績に依った。

No.	遺跡名	弥生5期	弥生6期 古墳2期	古墳3期	古墳4期	古墳5期	遺跡立地	検出遺構
1	北下条遺跡	■■■■■					藤井平	住居址1軒
2	中田小学校遺跡		■■■■■				藤井平	住居址3軒
3	堂の前遺跡	■■■■■					藤井平	住居址4軒
4	下横屋遺跡	■■■■■	■■■■■				藤井平	住居址8軒
5	久保屋敷遺跡				■■■■■		釜無川右岸 河岸段丘上	住居址4軒
6	後田遺跡		■■■■■				藤井平	住居址2軒
7	立石遺跡					■■■■■	藤井平	住居址2軒 掘立柱建物址1棟
8	伊藤窪第2遺跡					■■■■■	韭崎台地	住居址2軒
9	宿尻遺跡					■■■■■	韭崎台地	住居址3軒
10	坂井南遺跡		■■■■■				韭崎台地	住居址98軒 周溝墓12基

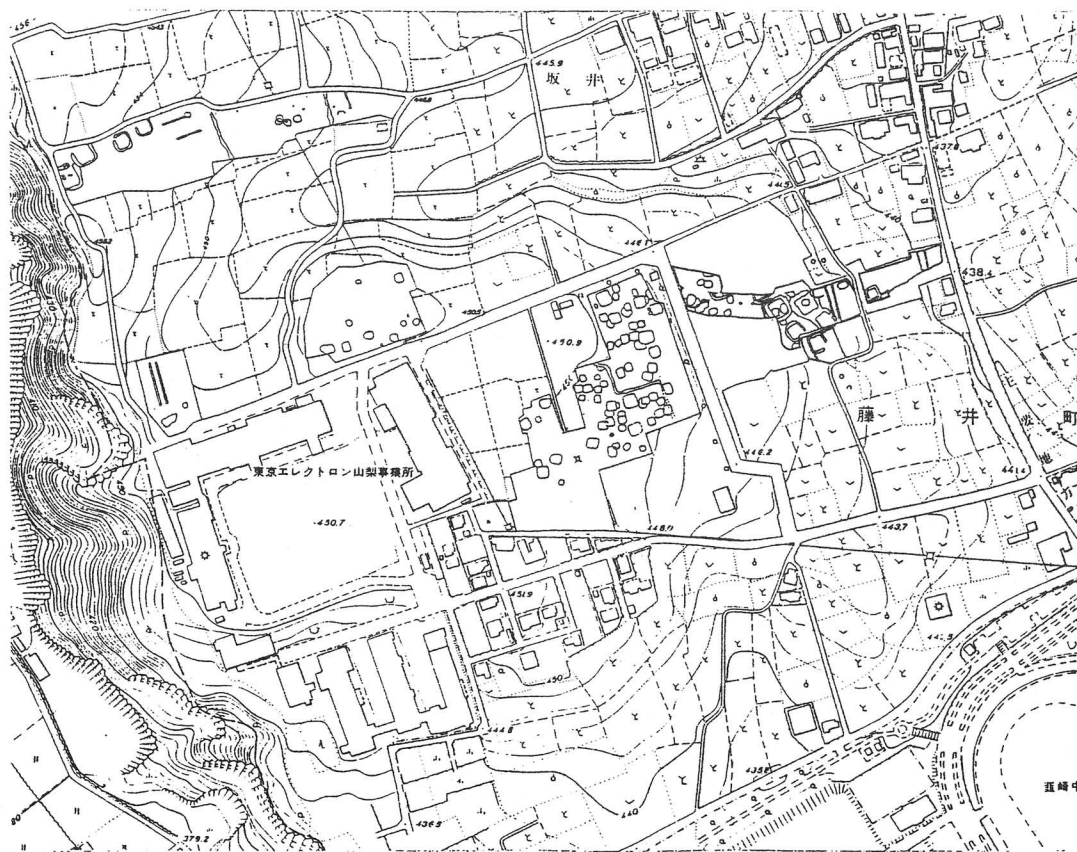
弥生時代後期、藤井平に存在した遺跡はそれ以降へ展開を見せず、一方、古墳時代2期にいたり坂井南遺跡が突如、韭崎台地上に出現する。以後、坂井南遺跡は古墳時代前期を通じて安定した経営が認められ、藤井平から台地上に生活の中心舞台を移したかのような状況となる。その他、釜無川右岸地域では久保屋敷遺跡のみで状況が掴みにくいが、坂井南遺跡で住居址も増え最も安定する時期にその存在が確認できる。坂井南遺跡で住居址が減少し、集落として衰退に向かう頃、

伊藤窪第2・宿尻遺跡が台地上に出現し、藤井平では再び立石遺跡が出現する。古墳時代前期を通じて安定した経営が認められた坂井南遺跡の消長に合わせたように、市内各地に集落が拡散し始める。

市内では弥生時代後期から古墳時代前期を通じてほぼ連続して遺跡の存在が確認できる。古墳2期を画期として、現状では藤井平から葦崎台地上への立地変化が認められ、あたかも全人口が生活の中心舞台を移したかのような状況となる。ただこの変化が住居域の移動であり、生産基盤は依然として藤井平に置いていたと考えられる。

3. 方形周溝墓

1992年の第4次調査時には、それまで墓域は住居域と分離し、沢を挟んだ北側微高地上に展開するものと考えられてきたが、新たに集落の東側から方形周溝墓が5基検出された。その後、今日までその数を僅かに増やし、8基が確認されるに至った。



第90図 坂井南遺跡全体図 (1/5000)

住居址との重複関係が多く認められており、出土土器からは両者の時間差はほとんど認められない。墓域設定後に居住域としての利用は考えられないため、墓域設定より前に住居址は存在したものであろう。そこには当初からの計画的な墓域・居住区の設定は窺われない。新たに確認された方形周溝墓は2列程度の列構成をとり、集落を中心として、その周辺に配列するようである。周溝を共有し、または近接して列構成をとりながら、系列的な配置が認められる。血縁的紐帯の強い集団によって累世的に造墓活動が行われたことが窺われる。

一方で従来、坂井南集落の墓域だと考えられていた北側の方形周溝墓を沢を挟んだ微高地上に占地する異なる集団の墓群と解釈する余地が生じる。時を同じく台地上に移動した藤井平の集団は、あたかも坂井南遺跡に集束したかの様相を示しつつも、その実相は集団ごと台地上に占地し、それぞれの墓域を営んでいたことになる。

4. 小 結

古墳時代に至り突如とした、台地上への集落の移動には様々な要因が考えられよう。古墳出現期の人と物の動きを大きく評価し、外的な要因を重視する考え方。一方で、水田の開墾と水利・灌漑など大規模な協業を通じて結束した同一流域における広範囲な集落の結びつき、更には方形周溝墓出現に見られる、他の一般構成員から乖離しつつある首長とその家族の存在など内的かつ地域的な主体性を重視する考えもありえよう。当時の不安定な自然環境と血縁的紐帯に基づく労働力編成から集落は生産域と近接し、個別分散化して存在していたものと考えられる。台地上において沢を挟んだ北側微高地上に想定した異なる集団の存在など、協業を通じて結束しつつも台地上にあって、依然として集団ごとに占地していた様相が窺える。上位集団による統一といった単純な図式ではなく、内的・外的な要因によって坂井南集落は台地上に出現し、そして廃絶していったものであろう。

参考文献

1. 小林健二1993 a 「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
2. 小林健二1993 b 「外来系から在地系へー甲斐のS字甕の変遷ー」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
3. 小林健二1994 a 「甲府盆地の外来系土器」『庄内式土器研究』V
4. 小林健二1994 b 「甲斐における庄内式併行期の土器編年」『庄内式土器研究』VII
5. 中山誠二1987 「弥生時代終末における上の平遺跡の集落構造」『研究紀要』4 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
6. 中山誠二1992 「甲斐の方形周溝墓と前期古墳」『シンポジウム西相模の三・四世紀方形周溝墓をめぐる』東海大学校地内遺跡調査団
7. 中山誠二1993 a 「(II) 集落」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
8. 中山誠二1993 b 「甲斐弥生土器編年の現状と課題ー時間軸の設定ー」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
9. 橋本博文1984 「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地ーその歴史と地域性ー』地方史研究協議会編